医学生・看護学生と地域住民をむすぶコミュニケーションマガジン

vol 7
2014.12

めでる

「夏の宿泊研修・瑞龍寺(近江八幡市)にて」

Contents

スポットライト
草津市の医療福祉の現状と将来にむけて
草津市健康福祉部理事　米 岡　良 晃

特集
夏の宿泊研修 in 近江八幡市方面

病院紹介
滋賀県立成人病センター／豊郷病院

「人」
ヴォーリズ記念病院
ホスピス長　細 井　　順

看護学生向け情報
県民の健康を支える「縁の下」の力持ち
保健師の仕事の魅力

地域自慢
古い文化と新しい文化が溶け合うまち
宿場町 草津市

開催報告／講演報告／春の宿泊研修予告
ご入会・ご寄附のご案内／編集後記

NPO法人「滋賀医療人育成協力機構」広報誌

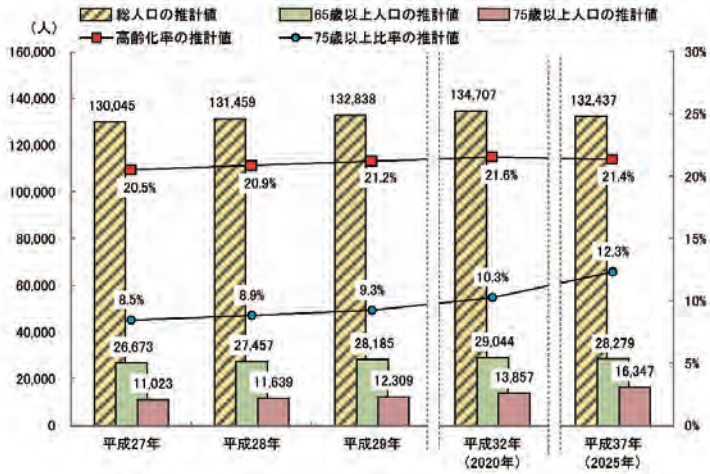
草津市の医療福祉の現状と将来にむけて

草津市健康福祉部理事
米岡　良晃

草津市は、今年、市制施行60周年の節目の年を迎えました。昭和29年の市制施行以来、京阪神のベッドタウンとして急発展を遂げ、人口は３万人余りから今や約13万人を数えるまでになりました。JRの二つの駅周辺の商業施設の集積した賑わいのある空間と、古くから栄えた宿場町としての面影を残す草津宿本陣などの歴史遺産、琵琶湖岸に広がる広大な農業地帯など、様々な顔を持った魅力的なまちです。こうした環境に惹かれ、子育て世代を中心に転入してこられる方も多く、全国的にも珍しく今でも人口増加が続いています。

一方、草津市にも少子高齢化の波は押し寄せています。全国では、2014年10月現在で、高齢化率は25％を超え、すでに４人に１人が高齢者の時代に突入していますが、草津市は高齢化率約20％と、まだ比較的若いまちではあるものの、高齢化は今後加速度的に進むことが予想されています。団塊の世代が75歳以上となる2025年までの10年間で、草津市の後期高齢者数は、現在の約1.5倍にも増加することが見込まれています。

草津市の高齢者人口将来推計



こうした時代を迎える中で、今後増大する医療・介護ニーズにも応えつつ、高齢者が安心していきいきと暮らすことのできる地域をいかに作っていくかが、大きな課題となっています。

そのためには、施設の整備などの医療・介護サービスの充実はもちろんのことながら、これらと予防、住まい、生活支援サービスとを切れ目なく、有機的かつ一体的に提供する「地域包括ケアシステム」を、日常生活圏域単位で構築していくことが不可欠だと考えています。そして、その際、ポイントとなるのが、専門職だけに頼らない「地域づくり」であり、「自助・互助・共助・公助」の最適な組み合わせにより高齢者を支える仕組みの構

▲草津宿本陣

▲学区の医療福祉を考える会議

築です。

こうした観点を持ちながら、草津市では、様々な取り組みを進めていますが、そのうちの一つが、多職種による協働の推進、そして地域の支援者をも含めたネットワークの構築です。中学校区ごとに設置した地域包括支援センターを中心に、「学区の医療福祉を考える会議」を開催し、地域で診療所を開設している医師、訪問看護ステーションの看護師、ケアマネジャー、社会福祉協議会のメンバー、民生委員、行政機関の職員など、幅広い関係者が集まり、地域の課題の掘り起こしやケース検討などを通じて、顔の見える関係づくりに取り組んでいます。

例えば、地域の中で孤立している独居高齢者などの具体的なモデルケースを詳細に設定した上で、自分たちなら何ができるか、誰が誰にどうアプローチすればよいのか、現状で足りないサービスや仕組みは何か、といったことを、それぞれの立場や専門知識を活かして活発に意見交換をしています。

これから我が国が直面する超高齢・多死社会においては、従来どおりの病院等での「施設完結型」の医療福祉サービスでは対応しきれず、病院等を退院した後の在宅での生活を地域で支える「地域完結型」のシステムという視点が不可欠になってきます。

そうした時代に、「学区の医療福祉を考える会議」を通して培った関係者のネットワークが、高齢者一人ひとりが住み慣れた地域で自分らしい在宅生活を送る上での力になると考えています。

また、この他にも、地域サロン活動の充実やボランティア等の担い手の発掘・養成など、地域福祉を推進する上で必要な「場」や「人」の確保にも努めるとともに、認知症があっても安心して暮らせるための対策として、認知症サポーターの養成、地域安心声かけ訓練（徘徊模擬訓練）の実施、認知症カフェの設置に向けた検討などにも取り組んでいます。

昨今、人口減少による消滅市町村問題や高齢化の2025年問題など、とかく悲観的な将来イメージが語られることが少なくありません。しかし、本来は、高齢であっても、障害があっても、その他様々なハンデがあっても、その人らしく生きていくことのできる地域やシステムを作っていくことは、全ての市民にとって住みやすいまちづくりに繋がるはずです。そうした「誰もが安心していきいきと暮らすことのできるまち草津」を目指し、「支える人」と「支えられる人」という一方的な関係を超えた、市民みんながそれぞれに持てる力を発揮することで支え合える地域づくりに、より一層取り組んでいきたいと考えています。

米岡 良晃

平成19年　厚生労働省入省
雇用均等・児童家庭局総務課、
労働基準局労働条件政策課、
医政局指導課企画法令係長等を経て、
平成25年　草津市役所に出向

▲琵琶湖岸に群生するハスと風車

夏の宿泊研修

in 近江八幡市方面

8月28日㈭～29日㈮の２日間、滋賀県で学ぶ医学生・看護学生や滋賀県出身の医学生看護学生を対象とした地域・医療理解のための宿泊研修を実施しました。研修には、滋賀医科大学と近江八幡市立看護専門学校の学生20名が参加されました。

１日目◆日本で唯一淡水湖に人が住む沖島の地域見学と診療所を訪問、近江八幡市内の中核病院を訪問しました

沖島（説明・見学）・沖島診療所（見学）

地域見学の他、週に１回コミュニティーセンターで開所される診療所の見学をしました。地元の食材がつまった婦人会の方の手作りお弁当を昼食にいただきました。

近江八幡市立総合医療センター（説明・見学）

西澤副院長から病院の概要について説明いただいた後、院内の各施設の見学をしました。また、沖島の診療について説明を聴きました。

グリーンホテルYES近江八幡（交流会・宿泊）

交流会第１部　講演／近江八幡市蒲生郡医師会　副会長　山本　克與氏

テーマ「近江八幡地域における医師会活動と沖島等での医療活動の実情等について」

講演／ヴォーリズ記念病院　在宅サービス部門長
（兼）訪問看護ステーション・ヴォーリズ所長　向　美保氏

テーマ「訪問看護ステーションでの活動報告」

交流会第２部　研修先の方や里親・プチ里親との情報交換や交流の場となりました。

２日目◆旧近江八幡市内を見学、地域の慢性期医療を支えるヴォーリズ記念病院を訪問しました

近江八幡市旧市街地（説明・見学）

琵琶湖を一望できる八幡山、日牟礼八幡宮やヴォーリズ記念館などを見学しました。

ヴォーリズ記念病院（説明・見学）

細井緩和ケア部長からホスピス医についてのお話と周防病院長から病院概要について説明をうけた後、リハビリテーション棟や訪問看護ステーション、ホスピス棟を中心に見学しました。また、礼拝堂へも見学させていただき安部牧師からお話を聴きました。

訪問先の皆様からのメッセージ

近江八幡市立総合医療センターの概要と地域医療について

近江八幡市立総合医療センター　副院長　**西 澤　嘉四郎**

８月25日午前に全国で唯一の湖に浮かぶ離島である沖島の診療所を見学し、午後に当センターでの研修・施設見学をしていただきました。東近江医療圏での医療供給体制として急性期病院、回復期～療養型病院、診療所の機能・役割分化をすすめる取り組みを行っています。当センターでは、平成16年より外来患者が「かかりつけ医」を持つように推進し、外来受診者数を減らし、入院を中心とした急性期病院へ特化していく取り組みを始めました。日頃の診療は身近な診療所できめ細かに対応し、高度な検査や手術、急病時などで必要な時に、当センターが対応するということになります。そのために、診療所との紹介・逆紹介を勧め、逆に、当救急救命センターでは救急車の受け入れをできる限り行い、救急車への応需率は98％以上となり積極的に救急の受け入れを行っています。

▲近江八幡市立総合医療センターにて

また近年、近隣病院の回復期リハビリ病床が増加したため、圏域内病院への転院・連携を強化し、当センターではより超急性期医療へと重点を置き、病病・病診連携通じて医療圏域内で循環型医療連携が完結できる体制の構築を目指しています。

さらに後期高齢者が最大に増加する2025年問題に対応すべく、ＩＣＴを活用した「びわこメディカルネット」や医師会が中心に運営している在宅介護支援システム「淡海あさがおネット」を有効活用し、在宅療養介護まで含む医療福祉介護連携システム及び体制の確立を計画しています。

今回研修された皆さんは、在宅医療への関心が高いように思いました。これからの地域の医療福祉介護体制についての理解を深め、将来に各人が実践したい医療のイメージを確立する参考となれば幸いです。

▲自然の光を取り入れた明るい院内を見学しました。

■訪問先の皆様からのメッセージ

■宿泊研修を受け入れて

近江八幡市立総合医療センター
看護部　副部長（教育担当）　森　博美

今回、滋賀医科大学の医学生、看護専門学校生の皆さんに、当院の理念が患者さんにどのような形で適正・適切な医療として提供されているかをお伝えする機会を得ることができました。短時間の研修でしたが、少しでも当院の魅力をお伝えできておりましたら望外の喜びです。

当院は、2006年10月に現在地に新築移転し、早や８年が過ぎましたが、熱心に見学された皆様には、院内の雰囲気から清潔感とゆとりを感じて頂けたようです。急性期病院でありながら、様々な役割を担う地域の基幹病院として、日々多くの入院患者さんの医療をチームで展開しています。急性期であっても患者さんに穏やかな入院生活を送って頂くための廊下や各部屋の、癒しを配慮されたつくりは、医療者にとっても、安全と信頼を築く場となっています。

クリミアの天使と呼ばれるフローレンス・ナイチンゲールの言葉に「実際に学ぶ事ができるのは現場においてのみである」とあります。　学生の皆様が、地域急性期医療の学びの場として当院を選んで下さるように、病院一丸となってさらに魅力ある地域医療を展開して参りたいと思っています。最後になりましたが、皆様方の今後益々一層のご活躍を祈念しております。

■宿泊研修を受け入れて

ヴォーリズ記念病院　院長　周防　正史

先輩の教えに「地域医療に奉職する」と言う言葉がありました。自分で考え、医療を通して地域に貢献しなさいと教えられてきました。「奉職」という時代がかった言葉が、今も通用するかどうかはわかりません。時代が一医師に求めるものは以前とは異なってきていますし、病院に来られる患者さんの意識もずいぶん変わってきました。しかし患者さんの為に最善を尽くす思いは、今も昔も変わりないことです。

当院は、今年在宅療養支援病院の認定を取得いたしました。在宅医療を支えていく主体は、往診をされるクリニックの医師であり、訪問看護師であり、在宅サービスを提供する事業所やケアマネージャーです。その患者さんが肺炎や脱水、腰痛、レスパイトやリハビリ目的の入院が必要になった時に受け入れ、そしてまた在宅で療養できるように帰す。それが在宅療養支援病院の役目です。一人の患者さんを無事に在宅へ帰すためには、家族だけでなく多くの関係者を巻き込み明確な意思を通していかなければなりません。そんな緊迫感が、今回の研修でどれだけ伝わったのでしょうか。どこの職場にも、金儲けではない仕事に対する理念があり、情熱があり、それを毎日あくせく頑張っている姿を感じていただいたのであれば、今回の研修受け入れの意義があったのではないかと思います。

訪問先の皆様からのメッセージ

訪問看護ステーションの取り組みについて

ヴォーリズ記念病院　在宅サービス部門長（兼）
訪問看護ステーションヴォーリズ　所長　向　　美保

ヴォーリズ記念病院の訪問看護は、昭和61年に外来看護師の当院の患者さんへの在宅支援からスタートし、平成５年に県内の訪問看護ステーションとして３番目に設立された歴史あるステーションです。現在では、訪問看護師16名（常勤換算12.5名）、理学療法士３名、事務職２名と大規模なステーションとなっています。今年の４月に新棟東館１階に事務所を移転し、スタッフが働きやすく隣接しているホームヘルパーステーションや居宅介護支援事業所との連携が今まで以上に行いやすいようにしました。また、看護学生や医学生等の実習も考慮し、カンファレンスルームや更衣室等の設備も整えました。広く明るい事務所でスタッフも実習生もいきいきと訪問に出かけています。

▲交流会で講演される向所長

さて、当ステーションの運営状況ですが、現在月利用者数約130名（介保84名、医保46名）、うち小児は８名、月訪問件数約790件、訪問件数比率は介保：医保＝６：４となっています。訪問エリアは、近江八幡市、竜王町ですが、東近江市や彦根市からの依頼も引き受けています。また、琵琶湖内の沖島へも定期船に乗って訪問しており、24時間365日緊急時対応をしているので、在宅看取りを希望される方など夜間の訪問は漁船で送迎していただくこともあります。近年、在宅看取り推進の時代に沿い、年間14～16名の看取りもさせていただいております。また、教育の面では、国内６名しかいない在宅看護専門看護師１名を雇用し、新人訪問看護師などの人材育成にも力を入れています。訪問看護経験年数５年以上の看護師が約８割を占め、実習指導についても約４割が講習を受けて指導にあたっています。

まだまだ「新卒者」の受け入れ準備が整ってはおりませんが、地域からのニーズに応えるべく若い人材を増やし、「やっぱり我が家がいちばん」と言っていただけるよう訪問看護の提供をしていきたいと思っています。

▲訪問看護ステーションヴォーリズにて

▲ヴォーリズ記念病院礼拝堂で安部牧師からお話を聴きました。

宿泊研修に参加して(学生の声)

▲八幡山ロープウェイ

滋賀医科大学　医学科４年生　正木　暁

私は滋賀県出身の者ではなく、さらに今でも実家から通っているため滋賀県については大学に行くまでの通学の景色しか知らず、どう考えても滋賀県の地域医療とはかけ離れた場所にいました。今回この研修に参加させていただいたのは、日本で唯一の湖に浮かぶ人が住む島である沖島に行くと聞いてとても興味を持って是非一度は行ってみたいと思ったからでした。沖島は島の半分にしか人が住んでいなく、また高齢化が進んでおり医療施設もコミュニティセンターの一室を診療室として使用するといった状態でした。様々な不便な面も知って、それでもこの島を好きで住んでいらっしゃる方々を地域医療が守っていかなければならないのだと見学しながら深く考えさせられました。

このように様々な滋賀県の観光地や医療施設、病院に行き色々な方々の話を聞かせていただく機会をいただけて本当に感謝しております。

滋賀医科大学　医学科２年生　関根　浩史

沖島診療所は週１回の無床診療所で、島の住民の方に必要とされる施設ということを実際に見て感じました。総合医療センターは全面ガラス張りで自然光を入れた明るい病棟、セクション毎に整理されたアクセスしやすい外来、また、急性期に特化した受け入れ態勢万全の救急といった設備面の充実が印象的でした。ヴォーリズ記念病院は対照的に回復期リハビリ設備や訪問系サービス、そして、ホスピスが充実していました。それぞれを見て回ることで近江八幡における医療施設の役割の違いや、お互いがスムーズに連携することで滞りのない医療提供体制が維持されるということを学ぶことができました。観光では元々好きな近江八幡の魅力を再確認できて良かったです。

滋賀医科大学　医学科２年生　力武　里菜

私がこの研修中最も印象に残ったものは、ヴォーリズ記念病院のホスピス医である細井先生のお話でした。その中で「外科医は、病気は治せるけれど患者を生かせない。ホスピス医は、病気は治せないけれど患者を生かせる。治せないからといって患者さんとのつながりが切れるわけではない。死んで終わりの生命ではなく、『いのち』を発見して共に生きる。」という言葉に私は非常に感銘を受けました。人は必ずいつか死にゆくものですが、いざ死が迫ると言葉では言い表せないほどの不安や恐怖に襲われると思います。そのような患者さんを前にして医師が病気だけを治療するのでは本当の意味で患者さんを生かすことはできないのだと気付かされました。患者さんが求める医師は優れた技術をもつ医師ではなく自分の不安な気持ちをわかってくれる、そして最後まで自分を見捨てず自分と同じ目線で共に生きてくれるような医師なのだということがわかりました。

ホスピスに限らず患者さんと心を通わせることの大切さはどの医療現場でも同じことだと思います。私は患者さん一人一人の思いを大切にして、患者さんを手放さずサポートしていけるような医師を目指したいと思います。

滋賀医科大学　医学科２年生　河原　早苗

私にとって今回の研修の大きな目的の一つは、沖島の離島医療を学ぶことでした。沖島ののどかで、ゆっくりとした時間の流れが心地よかったです。島だからこその島民同士の強いつながり、助け合いを感じました。そして何より、離島医療を行うこと、継続させることの大変さを知ると同時に、それを支える医師の熱意、そして島民の皆さんの理解・協力なくしては離島医療は成り立たないということを学びました。医療チームと患者さんやご家族との近くてあたたかい関係が地域医療の魅力の一つだと肌で感じました。

また、ヴォーリズ記念病院でホスピスの見学をしたり、近江八幡の古い街並みを散策したり、と医学生として貴重な学びの経験をしただけでなく、滋賀民として地域の魅力を感じることができ、とても充実した研修でした。

滋賀医科大学　医学科４年生　髙塚　淑子

今回で６回目の参加になります。この宿泊研修でおおよそ滋賀県を一周させていただきました。私は大阪の出身で、滋賀県には遠い親戚がいますが、会ったことはなく、知っている人も無いような状況でした。それから４年。里親支援やNPO法人滋賀県医療人育成協力機構紹介での実習などで得た交流が人的な財産として育ってきている実感がしています。交流会に毎回出席してくださるプチ里親の方々ともお目にかかれるのが楽しみの一つになりました。

研修にご協力くださった皆様、ありがとうございました。

八幡山からの近江八幡市内の眺め▲

宿泊研修に参加して(学生の声)

ヴォーリズ記念病院礼拝堂▶

滋賀医科大学　医学科３年生　橋 場　奈 月

今回初めて合宿に参加させていただきました！ 滋賀の魅力を感じつつ、特徴のある病院で勤務なさっている滋賀医大の先輩方から直接お話を聞くこともでき、有意義な時間を過ごすことができました。地域の方々との交流会では患者さん代表として出席なさっていたプチ里親の方とお話しする機会があり、多くを学ばせていただきました。また、参加学生の多くが初めて顔を合わせる方々でしたが、皆意識が高く、とても刺激を受けました。

滋賀医科大学　医学科１年生　北 脇　大 督

私は今回の研修合宿で、まだ見ぬ滋賀県の魅力について知ることができた。今回の研修先である近江八幡に近い野洲市に住んでいるが、いざ近江八幡のことを聞かれると何も答えられない。そんな中、今回の研修は、垰田先生がおっしゃっていたように、五感で体験することができた研修であったと思う。例えば、沖島などは、このような機会でなければ行くことはなかったであろう。私はそこでどのような生活をしていて、どういう風潮があるかなどを詳しく知ることができた。一見ただの観光旅行のように思える今回の研修合宿であるが、そうではないと思う。将来滋賀県で医療を行うためには、その地域の特性、医療の仕組みを分かっていなくてはならない。東近江医療区域の一部ではあったが、大まかにそのことを学べたと思う。そしてぜひ、また時間のある時に病院実習などに行き、滋賀県の医療には何が必要かをもっと学びたいと思う。

滋賀医科大学　医学科３年生　石 原　晶 子

他学年の学生や、看護学生、そして滋賀で活躍しておられる先生との交流があり、いろいろな働き方が見え隠れして、自分の将来について想像を膨らませていました。

沖島は家が密集していて、田舎の祖父母の家の香りがしていました。動いている車もなく、細い小道が島で一番大きな湖岸道路と聞いて、驚きました。古い消防艇という救急車の代わりの船が停まっていたり、島へ医療スタッフが船でやってきて、診察したりする様子を見せていただきました。このような小さな島で、年をとっても暮らすには、医療が行き届くようなサポートが必要だと知りました。

一番印象的だったのが、病気の状態によって、病院や診療所が分担をしているということでした。近江八幡市立総合医療センターは急性期の患者を、ヴォーリズ記念病院は慢性期の患者を担当しているという話を伺いました。そして、このように病院を病態によって転院するためには、お互いの情報共有、ネットワークが重要だということを知りました。

近江八幡市立総合医療センターは24時間体制の検査の準備などが整っており、無菌室などの設備もありました。光や緑を取り入れる大きな窓や庭があり、ここを急性期だけで退院してしまうのは、少しもったいないなあという気持ちもしました。

ヴォーリズ記念病院も、目が行き届くようにとか、光がいつも入るようになど工夫がされていて、感心しました。また、宗教を超えてメンタルケアに励む牧師さんのお話は、心に響きました。

沖島やヴォーリズ氏といった新たな滋賀の一面が見られて、刺激的な２日間でした。

滋賀医科大学　医学科２年生　北 川　奈津子

今回の研修で学ばせてもらったことは病病連携、病診連携、そして多職種間での連携が医療を円滑に機能させるために大切だということです。訪問させていただいた近江八幡市立総合医療センターは急性期に特化していたり、ヴォーリズ記念病院では緩和ケアをしていたりとそれぞれの医療機関がそれぞれの役割を担うことでその地域の医療が成立しているのだと感じました。

また、今回の宿泊研修で印象に残っているものに八幡山からみた景色があります。私の住んでいるところとは違い、高いビル等はほとんどなく、緑（田・木）と 青（湖）がたくさんあって落ち着きを感じました。自然の美しさ、温かさを感じることができとても癒されました。これからも滋賀県の医療を学ぶと同時に、琵琶湖をはじめとする滋賀県の美しい自然を感じられたらと思います。

◀八幡堀

写真提供／滋賀医科大学　写真部　今村 将輝

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学　医学科３年生　松本　竜司

今回は大病院（近江八幡市立総合医療センター）と中小病院（ヴォーリズ記念病院）を見学させていただき、非常に勉強になりました。地域医療をよりよいものにしていくためには、病診連携が非常に大切だと感じています。病院・診療所見学をしても、地域医療における診療所の取組みについて学ぶ機会はあったものの、病院の取組みはあまり話を聞ける機会がなかったので今回は非常によい機会となりました。宿泊研修は、ひとつの地域における病院・診療所、多職種からの様々な視点から見た地域医療を学び、その地域の文化についても楽しく学べる、とても有意義な研修でした。

滋賀医科大学　医学科１年生　澤田　真紀子

「地域医療とはなにか」について考えるきっかけとなりました。特に重要だと感じたことは、医療をする側がその土地についてしっかりと知ることです。知らない土地には愛着はわきません。私は大阪出身ですが母が滋賀県出身で全くのよそ者ではないですが、今回沖島や近江八幡の散策で知らない場所に沢山行きました。「こんないいところがあってこんな食べ物があるのか」と五感で感じることができました。夜の懇親会で垰田先生が「食べて知ってもらう」とおっしゃっていましたが食は毎日のことで大変重要です。毎日の楽しみでもあります。改めて滋賀県の「食」について知れたことは大きかったです。「地域医療」と構えてしまうととても遠くの存在に思えてしまいますが実際にその地域で生活する一員になる、と考えることがスタートだと思います。今回の研修でそれを強く思いました。まだ医師になるまで５年半あります。その間にもっと滋賀県をまわって滋賀県について知りたいですし、今後も学校でこういった研修があれば積極的に参加したいと思います。

企画してくださった先生やスタッフの皆様、案内してくださった現地の皆様、そしてこの活動に対しご寄付をくださった皆様に感謝いたします。

滋賀医科大学　医学科２年生　牧野　愛

特に沖島診療所を見学させていただいたのが心に残っています。島での医療には本土とは異なる大変さが存在し、また、それを支える方々の思いを感じました。その日の夜の懇親会では、沖島で診療をされている医師の方から貴重なお話を伺うことができました。また、近江八幡の美しい街並みを散策したことも印象に残りました。

滋賀医科大学　医学科１年生　坂井　有里枝

近江八幡は一度も訪れたことのない土地で、沖島や八幡山、日牟禮八幡宮やヴォーリズ建築とすべての観光地がとても面白かった。

病院の見学も、二つの機能の異なる病院について学び、また実際に見学することで、大変勉強になった。特にホスピスに関しては、自分が思っていたものと少し異なるということを知ることができた。

滋賀県の様々な地域や医療の一端を垣間見ることができるこの研修旅行は、県外出身者も県内出身者も、もっと参加してくれたらいいと思う。そして互いの出身地と比べながら色々議論できたら、もっと深みのある研修になるのではなかろうか。

滋賀医科大学　医学科１年生　木内　亮平

東近江医療圏の近江八幡市を訪れ、沖島へも行くことができ、そこでの地域医療の現状や文化について学ぶことができました。私は滋賀県民なのですが、研修旅行で初めて知ることが多く、滋賀県について新たな発見ができました。そして、滋賀県の医療について知って考える良い機会になりました。

また、滋賀医大の先生・先輩や他の学校の人との交流もでき、普段の学校生活では交流のなかった方とも知り合えて、非常に楽しく過ごすことができました。

滋賀県の良さについて知ることができ、さらに新たに人との交流がもて、本当に有意義な時間を過ごすことができました。次回の宿泊研修にもぜひ参加させていただきたいです。

滋賀医科大学　医学科１年生　今村　将輝

今回私は自分の見聞を広める意味で里親研修に参加させていただきました。ヴォーリズ記念病院や、沖島の方たちの生活を五感で感じ取ることができ、非常に有意義な２日間であったと思います。私にとって実際の医療を医師の視点から見させていただくことが出来たのは非常に大きなことでしたが、それ以上に奈良県出身の私は滋賀について知っていることがほぼなかったため、大学生活で関わっている部分以外の滋賀県を感じてみて、滋賀にしかない魅力を知ったのも予想外の収穫であったと思います。

沖島港▶

宿泊研修に参加して(学生の声)

近江兄弟社学園▶
ハイド記念館

◀ヴォーリズ記念病院
五葉館

近江八幡市立看護専門学校 3年生　中島　匡晶

参加してみて日頃、専門学校では関わることの無かった医大生の方と共に地域医療を学び交流する事ができ、将来の地域医療を担うもの同士で交流する事でとても良い刺激を得ることができました。こういった他職種の学生同士で地域医療を学び交流する事は、私の中で漠然としていたチーム医療や地域医療に対してのイメージをより身近に感じることができました。

今後は、より勉学に励み地域医療のために貢献していきたいという思いを新たに持つことができ、今回宿泊研修に参加させて頂き本当に良かったと思いました。

滋賀医科大学　医学科2年生　大東　親生

この度は近江八幡市の地域医療を見学させていただきまして、近江八幡市における医療機関の役割分担を学んだものと思います。

はじめに見学させていただきました沖島の診療所では、公民館の一室が臨時に診療所となるということで、お忙しい中を覗かせていただきまして、島民の方々の医療に対する信頼をなんとはなしに感じました。

次に見学させていただきました近江八幡市立総合医療センターは、急性期のための病院として特化しておられました。その諸設備が、他地域と比べての規模の大小および優劣がどうであるかということは、見聞がいまだ狭い故に私には分かりませんでした。しかし新しい普請の施設と、医療センターの方々のご説明とをうかがって参りますと、近江八幡市の地域医療をどのように前進させていくかということについて、医療センターの方々が有する明らかな意識と情熱とを私は感じたものです。

最後に見学させていただきましたヴォーリズ記念病院は急性期の病棟も有しておられましたが、より回復期や在宅支援に特化しておられるという印象を抱きました。山間の瀟洒な建物は独特な静けさをたたえており、そのなかで患者の方々がリハビリをしておられるところやホスピスの施設の如何を見せていただいたことで、さきに見学させていただいた近江八幡市立総合医療センターとずいぶん雰囲気が異なることに驚いたものです。

近江八幡市立総合医療センターはやはり、近代医学と申しましょうか、活発な作用によって病に立ち向かおうという雰囲気がございましたが、ヴォーリズ記念病院のほうは、むしろゆっくりと、人のペースにあわせていくような、医療という一種の極限と我々の日常との段階的な中間領域のような、そんな雰囲気を感じたものです。こうした漠然とした全体の空気の違いも、病院の持つ役割の違いから出来するものかと思われました。

滋賀医科大学　医学科4年生　山本　陽平

今回の宿泊研修では、二日間に渡る盛りだくさんのプログラムによって多くのことを考える機会をいただけたと感じています。一日目の沖島訪問では、沖島の独自の風土や文化に触れ、沖島に暮らす人々が日々どういったことを問題としているのかという視点に立つことができました。二日目にはヴォーリズ記念病院を訪れ、最後を迎える人たちに対して医療者ができることの一端を知り、感銘を受けました。今後地域に根ざした医療のあり方というものを考えていくなかで、こうした今回の経験を活かしていきたいと思っています。

滋賀医科大学　医学科1年生　藤岡　彩夏

里親支援プログラムに参加して初めての合宿ということで、どれほど堅苦しいのかと直前まで緊張していたが、全体的にとても穏やか雰囲気で、とてもリラックスできたように思える。その中で観光や交流会を挟みつつ、滋賀の医療について見聞し経験できたことは貴重だった。今回の里親研修で特に思い出深かったことは、近江八幡市立総合医療センターの見学である。病院はいつか飽きるぐらい行くようになると大学の方は仰るが、現場の様子を見られたことは純粋に楽しかった。また、大津で育った私の知らない、別の総合病院の姿を今のうちに知れたことも大きかった。毎回滋賀を巡るようにして研修先は変わるということなので、今回のような形ならまた参加したいと思えた。

◀旧近江八幡郵便局

写真提供／滋賀医科大学　写真部　澤田 真紀子

滋賀県立成人病センター

臨床研修病院として

人材育成センター長：山 本　孝 吉

平成28年度開院予定の新病棟完成図

当センターは超高齢社会における県民の皆様の医療ニーズに応えるために、「こころのふれあいを大切にして安全で質の高い医療福祉を創生し提供する」という理念のもと、がん・血管病（心疾患・脳血管障害など）・認知症などを中心に、高度医療と全県型医療を展開しています。がん診療においては、都道府県がん診療連携拠点病院として、診断・治療・緩和ケアが一体となった高度医療を展開し、血管病においても血管内治療などで実績を積み重ねています。併設の研究所では、がんや認知症について、基礎的および臨床的な研究を進めています。また、病院機能の一層の充実を目指して、新病棟の建設を進めており、平成28年度に開院する予定です。

当センターは、医学生・看護学生・薬学生などの実習や初期研修医の研修にも大きな力を注いでいます。基幹型臨床研修病院として、指導医・スキルラボなどの研修施設・院外協力病院等をますます充実させて、研修に集中できる環境を整備するとともに、幅広くさまざまな分野を経験すること、高い志と研究心を持ち考え続けること、研修を楽しむことなどをモットーに、医療者としての第一歩を踏み出していただけるように、レジデントカンファレンス、CPCを定期的に開催し、また、シニアレジデントを中心として運営される抄読会や、ベテラン医師と共に「研修医の皆さんと考える」と名付けられた勉強会を開催しています。さらに、全県を視野に、現職の医療関係者を対象として進めている、将来の地域医療に必須の多職種協働チーム医療に資する人材の育成を目指した研修に参加し、他職種の知識や技術を学ぶことも可能です。

診療科目：内科（血液･腫瘍、糖尿病･内分泌、老年、免疫、神経、循環器、腎臓、消化器、呼吸器、総合）、外科（外科、整形、脳神経、呼吸器、心臓血管）、泌尿器科、婦人科、眼科、耳鼻いんこう科、皮膚科、麻酔科、放射線診断科、放射線治療科、緩和ケア科、歯科口腔外科、リハビリテーション科、病理診断科

学会認定施設：内内科学会、心血管インターベンション治療学会、血液学会、消化器内視鏡学会、消化器病学会、循環器学会、消化器外科学会、外科学会、整形外科学会、泌尿器学会、眼科学会、産婦人科学会、婦人科腫瘍学会、耳鼻咽喉科学会、医学放射学会、麻酔科学会、歯科麻酔学会、ペインクリニック学会、リハビリテーション医学会、乳癌学会、臨床細胞学会、病理学会、脳卒中学会、感染症学会、静脈経腸栄養学会、静脈経腸栄養学会、気管食道科学会、皮膚科学会、緩和医療学会、認知症学会、放射線腫瘍学会、口腔外科学会、神経学会、肝胆膵外科学会、不整脈学会・心電学会、臨床腫瘍学会、胆道学会

「研修環境と研修プログラム」

わが国では、急速に進む少子高齢化に伴っておこる、社会構造、疾病構造の変化や国民のニーズの多様化・高度化などに対応するために、地域医療連携と患者さんを中心とするチーム医療の推進等が求められ、それに対応して、初期臨床研修体制の整備、内容の充実が必要になっています。当センターの研修プログラムは、上記のように、医師としての人格を涵養するとともに、将来の専門性に関わらず、日常診療において遭遇する疾患に適切に対応することができるよう、基本的な総合的診療能力（態度、知識、技術）を身につけることを目的としています。研修期間中、研修医合同カンファレンス以外にも多数のセミナー、講演会が開催されます。是非、共に学びましょう。

年間スケジュールの一例

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年次	内科Ⅰ 循環器、神経		内科Ⅱ 呼吸器､糖尿病･内分泌		内科Ⅲ 消化器､血液･腫瘍		救　急			小児科	産婦人科	精神科
2年次	地域医療	選　択（11ヶ月）※選択科として、緩和ケア科、放射線治療科、病理診断科、協力病院特定診療科も選択可能です										

研修医メッセージ

滋賀県立成人病センター　研修医　工 藤　慶 子

皆さん、はじめまして。滋賀県立成人病センター初期研修医の工藤慶子と申します。私は滋賀医科大学卒業後、滋賀県立成人病センターで研修させて頂いております。この場をお借りして、私が思う当センターでの研修の魅力を３点、紹介させていただきたいと思います。

①大学病院で扱うような非常に稀な疾患からcommon diseaseに至るまで幅広く様々な症例を診ることができます。成人病センターでは、がん、心臓疾患、脳卒中などの分野において、専門的で高度な治療を行っています。また、同時に、湖南地域の医療を支える市中病院としての役割も担っています。このため、私自身もまだ内科研修の６ヶ月が終わったばかりですが、いわゆる「風邪」や、気管支炎といったcommon diseaseから、症例報告ができるような難しく稀な疾患まで経験させていただきました。

②研修プログラムの自由選択の期間が、２年目に11ヶ月も設けられています。この期間に、将来自分が専門としたい科に進むために必要な科を、自由に選択することができます。当センターで研修を行った先輩方から、この自由選択の期間を有意義に過ごせたことが、後期研修への大きなステップになったと聞いております。

③先生方もコメディカルの皆さんも、研修医をスタッフの一員として暖かく迎えてくださいます。研修医の数は現在６名と決して多くありませんが、少人数であるからこそ、指導医の先生方は研修医一人一人を本当に良く見てくださっています。研修医の理解度や頑張りを適切に把握してくださり、指導に活かしてくださっていると感じています。先生方はお忙しい中でも、研修医のための勉強会などにも参加してくださり、非常にありがたく思っています。このように暖かい雰囲気の中で研修できることは、自分自身の勉強のモチベーションにもなっていると感じています。

もし、私が感じた３つの魅力に少しでも興味を持った方がいらっしゃいましたら、是非、病院見学に来てください！ 研修医一同、お待ちしています。

PCスペース

レジデント合同カンファレンス

シュミレータ室

看護部メッセージ

“癒しの看護”を一緒に実践しませんか？

はじめまして、滋賀県立成人病センター　看護部です。

今から14、５年前、テレビ等で「癒し系」の言葉が使われるようになり、世間に広く「癒し」の言葉が広まりました。成人病センター看護部でも、時を同じくして、少しでも寄り添う看護を提供することをめざし、「癒しの看護」を合言葉に頑張ってきました。患者さん・ご家族の方はもとより、志を一つにする仲間同志も癒し、癒される関係でありたいと思っています。

新人看護師を迎えるに当たっては、社会人１年生として現場に出る前から現場の指導者や認定看護師と集合研修を通してふれあいを持っていただき、よりスムーズに現場へと馴染んでいただく工夫をしています。また、慣れない環境での不安を少なくするために、月に１度、新規採用者が近況報告できる場を設定したり、新人研修担当者と臨床心理士によるメンタル支援に積極的に取り組んだりして、きめ細やかな新人看護師支援を実施しています。是非、一度お気軽に病院見学にお越し下さい。待っています!!

滋賀県立成人病センター
〒524-8524　滋賀県守山市守山五丁目４番30号
TEL 077-582-5031　FAX 077-582-5426
http://www.pref.shiga.jp/e/seijin/

公益財団法人　豊郷病院

病院の概要

“豊かな郷で心と体の健康を　家族のように”が豊郷病院の基本理念です。この理念に基づき、地域の医療・保健・福祉を郷土愛と博愛の創立精神で支えていくことが病院の使命だと思っています。豊郷病院の特徴である一般病棟に精神科病棟・認知症外来・訪問看護ステーション・介護老人保健施設・居宅介護支援・訪問リハビリテーション・グループホーム・デイサービスセンター・ヘルパーステーションなどを併せ持つ、複合医療施設（県内では唯一）の機能にさらに、回復期リハビリテーション病棟・地域包括ケア病棟を新設し、今まで以上に地域の皆様のお役に立てるように診療を行っております。その他に、臨床精神医学研究所における臨床研究とともに、内科系・外科系の医師のキャリアアップが出来るように学会施設認定の推進と大学病院との連携で、臨床研究も推奨しております。看護師・薬剤師などすべての職種においても、同様な姿勢で同僚の確保と育成に情熱をもって望んでおります。

病 床 数：一般病棟／186床、精神病棟／120床、療養病棟／32床

診療科目：内科、外科、整形外科、消化器内科、呼吸器内科、呼吸器外科、循環器内科、脳神経外科、眼科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、歯科、歯科口腔外科、小児科、婦人科、皮膚科、麻酔科、精神科、心療内科、リハビリテーション科、放射線科、血液浄化センター、認知症疾患医療センターオアシス、呼吸リハビリテーション、精神デイケア

施設認定：

- 日本医療機能評価機構認定病院
- 日本消化器内視鏡学会専門医制度指導施設
- 日本呼吸器科学会認定施設
- 日本外科学会外科専門医制度修練施設
- 日本整形外科学会専門医研修施設
- 日本精神神経学会精神科専門医制度研修施設
- 日本眼科学会専門医制度研修施設
- 日本循環器学会認定循環器専門医研修関連施設
- 日本麻酔科学会認定施設
- 日本泌尿器科学会専門医関連教育施設
- 日本老年医学会認定施設

関連施設：

- 介護老人保健施設　パストラールとよさと
- 居宅介護支援センター　マックスとよさと
- 居宅介護支援センター　マックスひこね
- ヘルパーステーション　ピンポンとよさと
- 訪問看護ステーション　レインボウとよさと
- 訪問看護ステーション　レインボウはたしょう・レインボウたが
- 訪問看護ステーション　レインボウひこね
- 訪問リハビリテーション　アイルとよさと
- 彦根市地域包括支援センター　きらら・ゆうゆう
- 甲良町デイサービスセンター　けやき・らくらく

院長メッセージ

豊郷病院　院長　蔦 本　尚 慶

私は滋賀医科大学の２期生です。24年間大学で診療・研究・教育にかかわってきましたが平成23年から豊郷病院に地域医療を担うために赴任しました。豊郷町のゆるキャラの一よいとちゃん一と一緒に地域医療の為に職員一同協力して頑張っています。「一隅を照らす」を精神的支えとして滋賀医大が設立されました。「一隅を照らす」とは、それぞれが置かれている立場でベストを尽くすという教えです。一人が光れば、そのお隣も光り、町や社会が光ります。小さな光が集まって、地域を、日本を、やがて世界を照らすという教えです。この教えは、激動の時代にもいかされていると思います。一つ一つの光を大きな光にするには、絆が必要です。

豊郷病院見学とよいとちゃんに会いにきてください、お待ちしています。

Dr. メッセージ

精神科医　小 林　恭 子

滋賀医大卒業後、地元の市立病院で初期研修を始め、その協力施設であった当院精神科で半年の研修後、引き続き勤務させていただいております。豊郷病院精神科は一般・療養病床合わせて120床の精神科であり、滋賀県湖北地域においては認知症疾患医療センターとして認知症患者さんの診療の拠点にもなっている病院です。また、昭和32年開設当初からの診療記録が整理保存されているなど長い歴史を感じることができる一方、全身麻酔下での修正型電気痙攣療法も可能な施設で、精神科医療に初めて携わることになった私にとって興味や意欲が湧きたてられるような場所です。

精神科で働き始めてみると、精神科医療が必要となるのは精神病患者さんだけでなく、社会的要因による場合もあるようで、地域社会において求められている役割は想像以上に大きい状態だと感じました。そのような中で、精神科医として目指していくべきことは何かを考え、さらに社会人として福祉や行政機能にも改めて意識を向けるようになりました。日々悩むことばかりですが、たくさんの先輩医師の方々、看護師さんや職員さんに支えられ毎日を送っています。豊郷病院は地域に根ざした総合病院です。ぜひ一度見学に来てください。

看護部長メッセージ

看護部　部長　力 石　　泉

『その人らしさの回復を目指し　その人らしく生きることを支える』看護を目指そう!!

もし、ナイチンゲールが、今の時代の病院の環境や看護の現状を見たとしたら、何を感じ何を思うでしょう。医療の高度化に伴い、どの人も一定水準を提供することが可能な時代となりました。しかし、治療は終わったけど、寝たきりになったり認知症が進行したというのでは元の生活には戻れません。

認知症疾患医療センターや精神科病棟をもつ豊郷病院の看護師たちは、ひとり一人の回復過程に合わせた治療環境や看護を提供しようと工夫を重ねています。せん妄と認知症をしっかりと区別し、せん妄からの回復を目指し、自立を支援し、自己決定を支援し、そして患者さんを幸せにしたいと願っています。

私たちは、患者さんから、その人がもつ能力はまわりの人たちの働きかけによって引き出されるという事を学んでいます。そして患者さんにとって最も大切な家族の方がもつ能力も、まわりの人たちによって引き出されます。専門職として家族とともに患者さんの回復過程をしっかりと整え、その人らしく生きることを支援できるようになりたいと日々奮闘している看護師たちに是非一度会いに来てください。ナイチンゲールになったつもりで、病院の環境や患者さんの様子を、是非確認に来ていただきたいと思います。皆さんからの連絡をお待ちしています。

＜連絡先＞　**公益財団法人 豊郷病院**

所在地：〒529-1168　滋賀県犬上郡豊郷町八目12
電　話：0749-35-3001
ＦＡＸ：0749-35-2159
ＵＲＬ：http://toyosato.or.jp
E-mail：toyosato@toyosato.or.jp

回復期リハビリテーション病棟

Interview

ヴォーリズ記念病院
ホスピス長　細井　順

〈外科医からホスピス医、そして臨床哲学へ〉

読者の皆様、こんにちは。編集部から私の足跡、学生へのメッセージをしたためるように依頼を受けました。私の若き日を振り返り、皆様の今後の学びの足しにならんことを願いつつ綴ってみます。

私の父も医師でした。父は基礎医学に身を置いていましたが、叔父４人は外科医をしていましたので、何の野心も持たなかった私は自然と医学部を受験することになりました。浪人して、その時にはじめて自分の子ども時代を振り返って、幸せな人生を歩んでいたことに気づかされました。これをきっかけに、何か他者のために仕事をしなければならないと感じ、真剣に医者になることを考えました。

ところが、大学に入学するとまずは体力作りと思ったのかテニス部に入り、こればかりの学生時代を過ごしました。テニス部では６人の同級生が卒業まで続けましたが、互いに切磋琢磨して５年生の時にはテニス部史上初の西医体団体戦優勝を成し遂げました。前年秋から西医体まで、医学部相手では一年間負けがありませんでした。当時は、テニスは負けたら終わり、試験は追試があるという原則で臨んでいたことを思い出します。

▲テニスに打ち込んだ学生時代（1976年）。

卒業後は、叔父たちの影響も大きく、外科医の道を歩みました。初めて虫垂炎を執刀したとき、苦痛にゆがんだ表情だった患者さんが、１週間後にきらきらと目を輝かせて退院する姿に、外科医の喜びを感じました。

▲ヴォーリズ記念病院ホスピス希望館

そのような喜びを味わったのはつかの間で、大学ではがんの手術が大半でしたから、経験年数と共に大きな手術に取り組むようになりました。その結果、手遅れでみつかり、手術ではがんを取り切れない患者さんも増えてきました。「先生は命の恩人です」という言葉を残して退院する患者さんにも出会いましたが、いつか再発しないだろうかと不安な気持ちで見送っていました。

そして、転移のために再入院した患者さんを診察する機会も増えました。手術がうまくいき、術後の経過も順調なら、患者さんのところへ何の躊躇もなく行くことできます。しかし、再発して苦しんでいる患者さんのと

ころへは足が向きませんでした。外科医には何もできなかったのです。腰椎に転移して四つん這いになり歯を食いしばっていた患者さん、「もう私は死ぬのですか」と問いかけた患者さん、何を尋ねても無言で俯いていた患者さん……このような患者さんへの対応を模索し始めたのは外科医になって10年を過ぎた頃でした。

外科医として13年目、1991年に日本死の臨床研究会に初めて参加しました。死にゆく人たちの医療・ケアに真剣に取り組んでいる医療者の姿には、開かれたものを感じました。それから一ヶ月後、父親が胃がんで手術を受けました。なんと、がん性腹膜炎とわかり、手遅れの状態でした。

▲スウェーデンへホスピス視察に行った帰り道、パリ セーヌ川の遊覧船で寛いでいるところ（1997年）。

▲映画上映を記念してポスターの前で。イオンシネマ近江八幡で、総支配人の小野瀬さん、上映委員会の藤原さんと（2013年）。

父は手術から３年３ヶ月後、淀川キリスト教病院ホスピスで最期を迎えました。その時に、患者家族として受けたホスピスケアに目からうろこが落ちる経験をしました。「何がいちばんつらいですか」と患者に尋ねる医療に私の心の霧が晴れました。父の死の翌年からホスピス医としてスタートを切りました。

ホスピス医になってからの経験で大きかったことは、私自身が腎がんの手術を受けたことでした。手術が終わって仕事に復帰した時、「お帰りなさい」と迎えてくれた患者さんがいました。その瞬間から、私には患者さんがいなくなりました。患者さんも自分も有限な時間を生きている仲間同士になったのです。手術は10年も前のことになりましたが、ホスピスでは私の仲間は「最後に先生に会えてよかった」と言い遺して順番に旅立っていきます。ホスピスは人生に意味を持たせることができます。このメッセージをドキュメンタリー映画『いのちがいちばん輝く日～あるホスピス病棟の40日』に込めました。この映画の詳細は **http://www.inochi-hospice.com** で検索して下さい。

今年、私は医師として37年目を迎えていますが、外科医の18年間は生きていくことを学びました。ホスピス医の18年間は生かされていることを学びました。

そして、これからは人間存在の根源的意味を探求する道、臨床哲学へと歩みを進めていきたいと願っています。

最後に、ここまで読んでくださった若い人たちへのメッセージですが、「人はひとりでは生きられない、死ねない」、「治療が困難で、苦しんでいる人ほど医療・ケアを求めている」ということを胸に刻んで、苦しむ人の目線でものを考えられる医療人になってもらいたいですね。

▲学外実習でホスピスに来た学生さん、スタッフとともに（2013年）。

県民の健康を支える「縁の下」の力持ち

保健師の仕事の魅力

みなさんこんにちは。

滋賀県健康医療課の保健師、野中と奥井です。

皆さんもご存じのとおり、保健師は、家庭訪問や健康教育を通じて、いろいろな立場や世代の住民が健康でいきいきと過ごせるよう、必要な情報を伝え支援を行うことで、その人に合った健康づくりのお手伝いをしています。

ただし、これは県民から見える『おもて』の仕事。そのうら、『縁の下』では、「誰がどうすれば､県民の健康をうまく支えられるだろうか」と考え､いろいろな機関と人（診療所の医師、病院の看護師、市町保健師など）とともに手を組んで、全体の仕組みをつくっています。この『縁の下』の仕事もとても大事です。

私たちが所属する健康医療課は、『縁の下』の仕事が中心。生まれる前から高齢者までの健康づくりと疾病対策に取り組んでいます。

私たちの担当業務は、糖尿病や慢性腎疾患、がんの予防や早期発見と早期治療、そして、患者の生活の質の向上のために、何が必要か検討し、対策の仕組みをつくることです。

では、実際にどんなことをしているでしょうか、例えば糖尿病対策は……

糖尿病対策

【こういう滋賀県民に･･･】

糖尿病や予備軍にならない

重症の糖尿病、合併症にならない

【そのために】

「研修会」の開催

医療機関、市町など指導従事者のパワーアップ

「ネットワーク推進会議」の実施

療養指導の向上のため課題を整理、取組の検討

【参加者の反応、効果】

そうか、健診受診者にこう助言したら役立てもらえそう

市町の健診結果通知とかかりつけ医の指導をコラボさせたら効果的

市町などの
保健指導従事者に講義中

▲保健指導従事者研修会（野中）

保健師の魅力

■達成感とやりがいがある！

住民全体を支える仕事です。ひとつの仕事が広くみんなの役に立った！と思えるときは、この上なくやりがいを感じます。

また、関係者が一体となり、事業が成し遂げられたとき、「ありがとう」と言ってもらえた時は達成感でいっぱいです。

もちろん、関係機関と一緒に目標に向かって頑張っていくためには、意見の調整を行う必要があり、正直悩むことも多いです。そんなときは、職場の人たちと一緒に今何が必要かどうすべきか考えながら解決しています。

■ワーク・ライフ・バランスがとりやすい！

保健師の勤務先は市町村、県など行政機関が大半。勤務は平日がほとんどです。

育児をしながら働く仲間が多く、なかには「育児短時間勤務制度」を利用して、遅めの出勤と早目の帰宅で育児を両立している人もいます。周りの理解と応援もあたたかいです。

結婚、出産して、その経験を活かしながら働き、成長したい人には恵まれた環境が整っています。保健師の仕事に興味のある人はぜひチャレンジしてください。

学生の皆さんへのメッセージ

仕事に悩むことは多いですが、そんなときに力をもらえるのは学生時代の同級生や先輩です。似た経験や悩みを分かち合って、共有して‥‥‥と、長く今でも特別な関係です。

学生時代から友達と人脈を大切に、そして、仕事に就いた後は、友達と交流するためにも「ワーク・ライフ・バランス」をとって、ともに成長していきたいですね。

文：**滋賀県健康医療福祉部健康医療課がん・疾病対策室**
保健師　**野中　梓、奥井 貴子**

●シリーズ 第５回

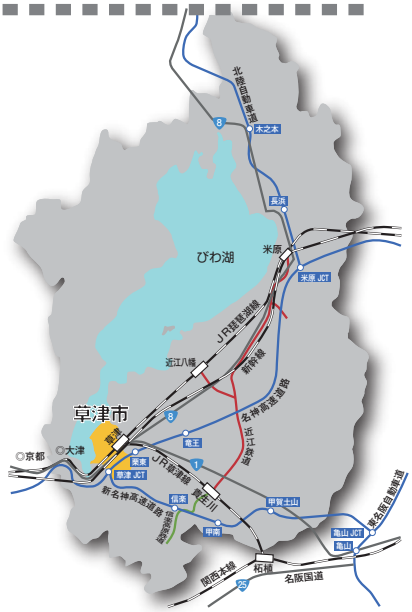
地域自慢 5

～古い文化と新しい文化が溶け合うまち 宿場町 草津市～

本陣

市制60周年を迎えた草津市は、東海道と中山道が分岐する琵琶湖南岸に位置し、古くから東海道五十三次の52番目の宿場町として栄えてきた湖畔のまちです。

JR琵琶湖線で京都から20分大阪から50分と近いことから、近年は近畿圏のベットタウンとして、また立命館大学の草津市への一部移転により学園都市として発展しました。草津市は昭和29年に人口32,000人余りの田園都市として誕生しましたが、人口は年々増加を続け現在は当時の４倍の129,000人になり、昨年度は東洋経済新報社調べによる「住みよさランキング」近畿ブロック１位に、本年度は西日本ブロック１位と近畿エリアでは２年連続ナンバーワンで高評価を受けるまでになりました。古くから受け継がれてきた人と人、人と情報、旧住民と新住民が溶け合って草津の新しい文化をつくり出しています。



江戸時代の草津市は、宿場町として参勤交代の武士たちやおかげまいりの道中の観光客などで賑わったといいます。草津の名所の姿は北斎や広重の浮世絵などにも残されているそうです。草津宿には、本陣２軒と脇本陣２軒を中心に70余りの旅籠が軒を連ねていました。現存する田中七左衛門本陣には約268畳の広さに部屋が30室余りあり、大名や公家が休んだ上段の間や湯殿などを見学することができます。

花蓮

琵琶湖周辺では、日本でも有数の花蓮の群生地でもある烏丸半島に草津市水生植物園みずの森があり、周遊できる庭園で多様な水生植物が観察できます。その隣には滋賀県立琵琶湖博物館もあり、琵琶湖の誕生から湖と人の淡水生物の関係などを学べます。

くさつ宿場まつり

草津市最大のまつり「くさつ宿場まつり」は大名行列とグルメストリートが人気をよんでいます。「草津街あかり華あかり夢あかり」はそのテーマどおり秋の夜長のロマンティックな灯りの祭典で、市民による「街あかり」をはじめ神社仏閣では「あかりART展」「草津宿本陣ライトアップ」など市民手作りのものから草津ならではの「創作あかり」が旧街道を彩ります。みなさんも一度足を運んでみて下さいね。みんなが楽しめるイベントです。

また、草津市は日本で最初に市民が「地域通貨おうみ」を出し有名にもなったまちでもあり、教科書や参考書にも載っています。

市民選挙が行われると市民団体が公開討論会を主催し市民によるマニフェスト検証もおこなっており、2011年には第６回マニフェスト大会で市民部門の優秀マニフェスト推進賞もとっています。昨年４月から自治体基本条例（市制運営のルールブック）もスタートし、市政と市民がより一層協力してこの住みやすいまち草津市を盛り上げて行くため新しいステップを踏み出しました。

街あかり　華あかり　夢あかり

文：ヒーリングセラピスト
滋賀医科大学里親学生支援室 プチ里親
／草津市木川町 在住　山本　惠美

開催報告

地域の皆さまと学生の交流「いきいき健康フェスティバル 2014」

長浜バイオ大学を会場として５月18日(日)に開催された「いきいき健康フェスティバル 2014」では、「まちのお医者さんと医学生の健康相談会」というブースが設けられ、８ヶ月の赤ちゃんから80歳台の方まで、相談にこられた51名の医療相談に、あざいリハビリテーションクリニック松井医師・宮地医師のご指導のもと、医療面接やコミュニケーションに関心のある９名の医学生がともに参加しました。

♪参加された学生さんからの声♪

- 「将来どのような医師でありたいか。」という自分の原点を考える素晴らしい機会となりました。
  また同じような志を持った学生と出会い、意見交換できたことに加えて、先生方の熱心で丁寧な指導のおかげで視野を大きく広げることができました。

- 同じ健康の悩みでも、人によって気にしていることが様々であることを実感しました。
  高血糖だから相談に来たということは共通していても、生活習慣や薬に対するイメージは大きく異なっており、異なるアドバイスを必要としておられることに気付かされました。大学で講義を聴いているだけでは学べない貴重な経験でした。

- 相手の反応を見ながらコミュニケーションをとる、表面的なものにとらわれずに相手の言いたいことを探る重要性を、頭だけでなく体で理解することができました。自分の将来の仕事にも生かせる内容で、参加してよかったです。

講演報告

第３回「卒業後の自分を考える」連続自主講座

11月６日(木) 午後６時から滋賀医科大学ＣＭＣホールにおいて「第３回卒業後の自分を考える連続自主講座」を開催しました。

精神科の先生のお話を聞きたいという学生さんの希望で、滋賀医科大学卒業生で現在は滋賀医科大学精神医学講座教授の山田尚登先生（２期生)、琵琶湖病院理事長・院長の石田展弥先生（２期生)、いしやまクリニック院長の有村真弓先生（23期生）をお迎えし、「将来の君たちに滋賀医大の先輩が語る－教授になる方法、病院長になる方法、クリニック院長になる方法－」というテーマでお話をしていただきました。

山田先生からは、統計資料をもとに滋賀医科大学開学以降30数年間に精神科に入局した医師達のその後の進路と現在の地位について、また、教授となるために必要な必須条件についてお話をいただきました。

石田先生からは、初めての精神科研修医として入局した当初から現在までの歩みを、同期生であった山田先生との関わりを交えながら楽しくお話いただきました。

有村先生からは、勤務医から開業医になった経緯を猫の話題を交えながら明るくお話いただきました。

どの先生も将来像を若い時から持っていた訳ではなく、チャンスが訪れた時に積極的にチャレンジした決断の結果が現在に至っているとのお話でした。

参加された22名の学生は、各先生のざっくばらんな生の話を聞くことができ、とても為になり、和やかで楽しい一時を過ごせたようです。また、自分の将来を考える良い機会になったようです。

ご多忙の中講演いただきました山田先生、石田先生、有村先生、本当に有難うございました。

♪参加された学生さんからの声♪

・「精神科医に興味があったので、今回参加させていただきました。先生のリアルな体験の話、精神科はさまざまな分野で社会貢献ができるといった、ここでしか聞けない話がたくさん聞けてとても楽しかったですし、将来こんなことをしてみたいという希望もたくさん持てました。

- 精神科のイメージが重い感じだと思っていたので、先生方もそんな感じなのかなと思っていましたが、とてもおもしろい方々で驚きました。自分に与えられたチャンスをいかに生かせるかが大切なのかなーと感じました。

- 生々しい話がお聞きできて、とても刺激的でした。三者三様のお立場からのお話は、微妙に差がある部分と一方で根っこのところで共通する部分もあって、とても参考になりました。

- 先生たちが楽しそうに話されていたのが印象に残りました。進路についてはまだ何も決められていないけれど、自分の履歴や現在について楽しく話せるような将来にしたいと思いました。

- とても楽しくためになりました。行政の関わりや、臨床と研究の関係など、考えたことのなかったようなお話もありました。あと、チャンスをいつも逃がしてしまう方なので、ものごとを恐れすぎずやってみることも大事だと思えました。

- 医局に入ると教授が人事を掌握しているということがよくわかりました。教授になるのに必要な条件という話は、他で聞いたことがなかったのでよかったです。

- さすが山田ファミリーという感じで本当に楽しかったです。開業は自分にはムリかなと思っていましたが、いけるかもしれないと思いました（笑）。医者＝まじめでなければ、と思っていましたが、楽しく生きるのが一番かなと思いました。

- 行動力があれば何でもできそうだな～と思いました。精神科の先生がすごくフレンドリーでびっくりしました。

春の宿泊研修では、来春3月18日（水）・19日（木）に湖北地域を訪問します。

湖北地域の医療関係者の皆さま、ご協力をお願いします。
興味のある学生さん、ホームページでチェックして下さいね。
ご参加をお待ちしています。

入会・ご寄附のご案内

滋賀医療人育成協力機構へのご入会、またはご寄附のお願い。

滋賀医療人育成協力機構は、地域の皆さまと共に地域医療を担う医学生看護学生の育成支援を行うとともに、滋賀県の医療福祉の向上に寄与することを目的に設立され、皆さまからの会費とご寄附を財源として、活動を進めています。

会員は

会員の種類		会　費	入会金（初年度のみ）
正会員	個　人	年会費　2,000円　＋　寄附金 3,000円以上	5,000円
	団　体	年会費　5,000円　＋　寄附金 5,000円以上	10,000円
賛助会員		毎年 1,000円以上　できましたら 3,000円以上	

ご寄附は

ご寄附いただく金額は決まっておりませんが、できましたら3,000円以上をお願いします。

入会・寄附に関するお問い合わせは、機構事務局（077-548-2802）にご連絡ください。

平成26年３月に「認定特定非営利活動法人」になりました。それに伴い機構に寄附をしていただいた方々は「税制上の優遇措置」を受けることができます。

「税制上の優遇措置」とは、
ご寄附された寄附額から2,000円を差引いた金額の寄附金控除、または寄附金特別枠控除（税額控除）を受けることができます。

「控除を受けるための手続き」
ご寄附いただいた方には「寄附金の受領証」を翌年１月早々に郵送しますので、その受領証を「確定申告書」とともに最寄りの税務署にご提出ください。
詳細については、最寄りの税務署にお問い合わせください。

編集後記

年の瀬を迎え、今年も残り少なくなりましたが、皆様はいかがお過ごしでしょうか。
８月に宿泊研修で訪問させていただきました近江八幡市は、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ氏の生涯の功績が市内のいたるところに残っていて、秋（10月～11月）にはヴォーリズ氏没後50年を記念する催しが開催され、さぞかし観光客でにぎわったことでしょう。
機構の活動にご参加いただいた方々、色々な面でご協力いただいた方々とのふれあいを通して、人と人との繋がりの大切さ、暖かさといったものを感じています。この冊子からも感じ取っていただければ幸いです。

NPO法人滋賀医療人育成協力機構 広報誌「めでる」vol.7

発　　行：平成26年12月１日
編　　集：NPO法人 滋賀医療人育成協力機構
所 在 地：滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内
ＴＥＬ：077-548-2802　FAX：077-548-2803
Email：satooya@belle.shiga-med.ac.jp
ＵＲＬ：http://www.shiga-iryo-ikusei.jp/